

インド出張報告

本社総務部

取締役総務部長 播磨忠好

- 出張期間: 11月23日～30日
- 訪問地域: デリー、アーグラ、ビジャヤワダ、ハイデラバード、プネー、ムンバイ
- 訪問先: ①アーンドラ・プラデーシュ州の卸売問屋、小売店、末端農家
(以上 Nichino India・中谷支店長様によるアテント)
②Gowardhan Dairy 社 (三井物産様によるアテント)
- 出張者: 幸田会長、高桑支店長、播磨(以上丹波屋)、三崎室長(三井物産)、横川社長
(幸和運輸)
- 目的: 現インドの農畜産業の視察及び情報収集、将来に向けての商売の模索等
(以下、敬称略)

1. インド共和国 概況

2023年国連人口基金推計では14億2860万人。2024年に中国を抜いて世界第一位の人口となる。面積は約329万km²(世界第7位)。首都はニューデリー。首相はナレンドラ・ダモダルダス・モディ(2014年～)。宗教はヒンドゥー教徒79.8%、イスラム教徒14.2%、キリスト教徒2.3%、他3.7%。言語はヒンディー語が公用語(英語は補助公用語)。通貨はルピー(1ルピー=1.8円)。渡航の際、日本人はパスポート以外にビザが必要。日本との時差は3時間半(遅い)。雨季(4～9月)と乾季(10月～3月)に分かれている。北部の山岳地帯は1月は濃霧が出ることもある。

インドの歴史は、古くは世界4大文明の一つに数えられるインダス文明(インドとパキスタンの国境付近)。アーリヤ人の侵入(カースト制度)、マウリヤ朝の成立(仏教全盛期)、グプタ朝(インド全土をヒンドゥー教による支配)、南インドでヒンドゥー王国成立、イスラム勢力の侵入(北インドを支配)、ヨーロッパ勢力の到来(東インド会社)、第2次世界大戦後のイギリス領からの独立(マハトマ・ガンディーによる)を経て今日に至る。インドは多様な文化と歴史を持つ国であり、急速に発展している世界第5位の経済大国で、主要産業はITサービス、農業、製造業、映画産業(ボリウッド)。インドは長年にわたり貿易赤字を記録しており、2024年10月の貿易赤字は約271億ドル。

インドの主要農作物は米、小麦、トウモロコシ、綿花、サトウキビ、茶、コーヒー、スパイスなど。特に米と小麦は主要な食糧作物。北部の寒冷地から南部の熱帯地域と多様な気候帯を持っていることから、地域ごとに異なる作物が栽培されている。畜産業は世界最大の牛の飼育国であり、バッファロー、ヤギ、羊、鶏なども多く飼育されている。乳製品生産国としては世界最大で、

牛乳やバツファローミルクが主要な乳製品。但し、ヒンドゥー教では牛は神聖な動物であるため、殺すことや食べることは禁じられており、イスラム教では豚は不浄の動物であることから食べることは禁じられている。総じてインドでは牛肉・豚肉を食べることは一般的ではない。

2. インド社会の特徴と習慣

- A. 自己主張が強い
- B. 挨拶は朝でも夜でも「ナマステー」(あなたを敬うという意味)
- C. 握手や物を受け取るのは「右手」(左手は不浄)
- D. 公衆便所に紙はなく、左手でお尻を洗浄する
- E. カースト制度の名残があり、貧富の差は大きい(物乞い多数)
- F. 飲酒を嫌う雰囲気(アルコールを置いていないレストラン多数)
- G. 公共の場所での喫煙は禁止(2003 年禁煙法施行)
- H. 人よりも車優先(事故多数発生)
- I. コレラ、マラリア、A 型ウイルス肝炎に感染する危険が高い
- J. 水道水の水は危険(ホテル、レストラン含む)
- K. 狂犬病を持った野犬、野猿が路上をうろついている(狂犬病は致死率 100%?)
- L. 炭水化物とスイーツ(意外と**美味**しい)が大好き(糖尿病で車椅子の方が多い)

3. 「Nichino India」によるアテンド

① 「Nichino India」の状況

親会社である日本農薬は ADEKA が 51%を出資している。Nichino India(以下 NIN)の本社はハイデラバードにある。ジェネリック製品を販売していた会社(ハイデラバードケミカル社)を 2015 年に日農が買収した。ハイデラバードケミカル社時代から南部に強い販売基盤を持っていたが、北部への展開が課題。同国最大の販社は UPL 社。日系企業では住友化学が 2000 年からインドに参入している。

会社設立当初は小売店向けの直接販売が多かったが、現在は大規模卸経由の販売にシフトしている。ただし、現場における需要開拓や普及活動は問屋・小売店ではなく、NIN のスタッフが自ら行っている。繁忙期には、臨時のスタッフ(普及員のような方)も追加して末端プロモーション活動を行う。

NIN はインド国内で 4 工場(原体 2 か所、製剤 2 か所)を所有。インドでは自社開発による新製品の登録を取得しても、法制度上、数か月後にはジェネリック製品の登録申請と上市が可能となるため、研究開発型企业としては研究費が十分に確保できない懸念はあるが、特許取得や早期のブランド構築によって自社剤のシェア維持を図っていく必要がある。

②「Nichino India」商品説明会 A

エリア作物: 棉、唐辛子(一期作)、タバコ

内容: 殺虫剤「ジンガラ(日本名: コルト)」

(コナジラミ対策)

「Tychi(日本名: ハチハチ)」(スリップス対策)の説明

参加人数: 約 80~100 名 (主に唐辛子栽培農家)

テルグ語圏

現地スタッフが品目説明実施後、農家グループ2軒に対し中谷氏が英語で質問し、現地スタッフが通訳。既に使用している農家数名に挙手してもらい感想を聞いて返答するスタイルで、多くの方々が自己主張①。農家の感想としては、製品は良いが他社製品(ジェネリック含む)と比較すると 3 倍以上高いと言われる。日本の高い技術を持って来ており、効果は他品目と比べて優れており、販売量が増えれば大量生産可能となりコストダウンできるので、多くの方に使用して欲しいとの回答。実際に試験区(圃場)を見てもらい、参加者に散布後の状況を確認してもらっていた。



この地域は高収益作物である唐辛子と綿花の相場を見ながら価格が高い方(高くなる方)を予想して作付けしている(昨年は唐辛子が高く、今年の作付けは唐辛子が増えたことから在庫増となり、来年は綿花が高くなる予想)。農家1戸当たりの耕地面積は 4~5acre (借地含む) で専業。労働は農薬散布 2 名、除草 3 名を外部から雇用。1acre 当り 8~10 日間隔で作業。収穫期はさらに 20 名の雇用を追加。多くの農家は手作業による人海戦術だが、トラクターを所有しているごく少数の農家は収穫期に使用。インド全土の唐辛子の耕作面積は約 80 万 ha で世界最大の生産量(世界の 41%)。約 4 ヶ月で収穫可能。棉は収穫まで 6 ヶ月以上掛かる為、一期作のみ。

NIN は、このような手法で年間 200 万人の農家に直接コンタクトすることを目標に掲げている。コストのかかる地道な活動であるが、NICHINO のブランドを高めるためには重要な活動であるとのこと。

幸田会長から、「現地に赴き、農家と対話しながら圃場を見てもらって効果を実感してもらうことは、商売の原点」とのお言葉があった。(私も営業時代に同様の手法を学んできたが、今の営業スタッフにも変わらずに取組んで欲しいと感じた)

③「Nichino India」商品説明会 B

エリア作物: 水稻

内容: 殺虫剤「オーケストラデュエット」(ウンカ対策)、殺菌剤「アチブ」(いもち病対策)の説明

参加人数: 約 40～50 名 (稲作農家)



先程同様に説明後、質疑応答、圃場確認。米の作付けは、7/1 頃に移植をし(インドでは概ね 80%が移植、20%が直播)、11/下に収穫。現地は穂が付き始めた頃。焼畑農業(大気汚染の原因)も行われている。訪問時はインドでは乾期に当たり、乾期の水源は雨期に降った雨を溜池に貯水し、水路で各水田に送る方法。米収穫後は、豆かトウモロコシを 2 期作目に作付け。乾季となることから水田後でも作付け可能。除草剤は必ず使用する。殺虫剤や殺菌剤の販売は病害発生状況に左右されるので、売上が不安定となることがある。バイエルやシンジェンタは NIN よりも早くにインドでの販売を開始しており、シェア率は高い。水が貴重なため、農薬散布時の水量が少なく圃場全体に行き届かず効果がないケースもある。トラクターも一部所有している農家もあるが、米収穫後の畑起こしに使用している。

④ 卸売問屋への訪問

販売品目:農薬のみ(水稻、豆類、胡椒) ※肥料、農薬の販売には免許が必要

取扱いメーカー:3 社のみ

上半期売上~4,000 万ルピー(水稻向け)、6,000 万ルピー(胡椒向け)

小売店の販売先:300 店舗(農家 10,000 軒以上)

米の二毛作のトウモロコシはインド政府の再生可能エネルギー(グリーンエネルギー)政策で、ガソリンへのアルコール混合割合を現在の 12%から 2025 年4月までに 20%まで引き上げるとしていることから必要な作物となってきた(過去はサウキビが主体)。このアルコールは主にトウモロコシ由来で製造されており、今の自給は、数字上 100%だが、一部輸入になっている。ただし N-GMO で輸入可能国も限定されており、ウクライナとミャンマーしかない。合わせて人口増加により鶏肉の需要も増えていることから、ここでもトウモロコシの使用が増えており、飼料不足に陥る可能性が高くなっている。輸出国だったインドが輸入国への転換によりシカゴ相場への影響が大きくなると予想され、今後、シカゴ相場の下支えとなる。(今回の訪問地域はインド国内第2位のトウモロコシの産地。国内シェア約 17%)

⑤ 小売店への訪問

営業時間 : 6:00~21:00 (閑散期 7:00~19:00)

販売許可 : 肥料、農薬両方



売上比率は肥料(60%)農薬(40%)。肥料の年間売上は 4,600 万ルピー。農薬の利益率は非常に高い。店前の黒板に相場表が記入されており、相場変動があるごとに販売価格も変更されている。日本でも同様の肥料成分オール 15 も書かれていた。袋の開いていた肥料袋の中身を確認したが化成ではなく BB。肥料の販売は約 30%が掛け売り(サイト 60~90 日)で、70%が現金回収。農薬は全て現金販売。仕入から同条件で買っていることが理由。回収遅延について聞いたが、明確な返答は得られなかった。

4. Gowardhan Dairy 社 (三井物産㈱によるアテント)

パラグミルクグループは、「Gowardhan」「Go Cheese」「Topp Up」「Avvatar」「Pride of Cows」など、様々なブランドの製品を有する乳製品メーカー。牛乳、脱脂粉乳、全粉乳、ナチュラルチーズ、プロセスチーズ チーズスプレッド、バターなどの多様な乳製品とプロテインを製造。業務用の主要顧客は「ネスレ」。チーズに関しては「ドミノピザ」や「ピザハット」と言ったピザチェーンが主要な顧客。チーズやとバターと言った乳製品は中東、北アフリカ、東南アジアの 27 カ国以上に輸出している。グループにて乳製品製造を担うパラグミルクフーズは牛乳製造工場とチーズ工場を保有している他、南インドに牛乳を供給するための工場も保有。直営牧場の他に小規模から中規模の酪農家からも集荷。集荷の基準は、乳蛋白や脂肪などインド国内基準に沿って行われている。マンチャーの牛乳工場では 120 万リットル/日の生乳を集荷し、内 100 万リットルを乳製品として製造。工場では 1,000 人が 2 交代で勤務し 24 時間操業。チーズ加工設備と機械はドイツのステファン・マシナリー社製。ISO や HACCP を取得しハラル認証も取っている。道中で立ち寄ったスーパーに牛乳が置いてなかったことら、流通経路を質問したところ、飲用乳は新鮮さが重視されるため宅配限定とのこと。

今回、日本国内でのランピースキン病発生を考慮して、2022 年にインド全土で蔓延したことから訪問を控えた直営牧場のバギヤラクシュミ牧場はホルスタイン種 3,000 頭を飼養。ロータリーロボット(GEA)・ミストシステムも導入しており、インド国内においては大規模で近代的な牧場。人口の増加(特に若い人の増加)に比例して乳製品の需要も 10%/年のペースで増えており、2027 年に向けて牧場拡張予定。日本と比較して 1 頭あたりの乳量は約 25~26kgと低く、これから改善の余地はある。広大な草地を所有し、自給粗飼料はアルファルファがメイン。購入飼料はトウモロコシ主体の配合飼料(委託TMR?)を給与。糞尿はバイオガス施設を所有し、牧場の電力として使用すると共に、残渣は肥料として活用。受精は判別精液を使用しており 90%が雌牛(雄牛の行方は無回答。禁忌?)。乳価について質問したが、牧場スタッフではないため、把握していなかったが、チーズやバターなどの加工用と飲用乳の仕入価格は同じとのこと。GAPは取得していない模様。

工場見学終了後、隣接したレストランでスタッフと昼食を取っていると、幸田会長が途中で離席し、戻ってきた際に、なんと！こちらの乳業メーカーのチェアマン(普段はムンバイ

に滞在)を連れて来ました！お互いに何か惹き付けるものを感じたのか信じられない状況に！同席していたスタッフの様子も変化し、我々に今まで以上に丁寧な対応に変わったのは言うまでもない。



チェアマンと一緒に撮影



乳牛メーカー工場内



幸田会長とチェアマン

【所感】

出発2週間ほど前からインド国内で大気汚染の注意警報が発令され、関連する資料・本を読むたびに伝染病、野犬、水質汚染等、不安な情報しか入ってきました。しかし、実際に現地に赴かなければわからなかったことが多々あり、非常に良い経験となりました。現地で奮闘する日本の方々の取り組みも非常に参考になり、まだまだやらなければならないことが世界には多くあることも実感しました。同行者をはじめ、現地でアテンドしていただいた方々に深謝申し上げます。

インディラ・ガーンディー国際空港に到着し、川本部長(三井物産㈱ムンバイ支店)に出迎えていただいた際の迎車までの道中、情報通りの夜空のスモッグ、鳴り止まない車のクラクション(A)、轢殺す勢いで走行する車、ホテルまでの車中から見える野犬、暗闇にたむろする人々を見て驚きました。これがインドかと…。

インド滞在中も一流ホテルに宿泊させていただきましたが、部屋の中に置かれているボトルに入った未開封の水を頼りに歯磨きや飲水(J)。室内には数匹の蚊が飛んでおり伝染病となる可能性(I)。トイレにはウォシュレットはなく、小さなシャワーが付いており、方向を間違うと水浸しに…。シャワールームは手に持つタイプと天井から落ちてくるタイプの併用で、間違うと冷水が頭からかかり罰ゲーム状態。シャワーもホースとの接続が悪いホテルもあり2ヶ所からの放水。改めて日本のホテル(ビジネスホテル含む)の環境の良さを実感しました。もし二流ホテル以下だったら、どんなに大変なことになっていただろうと想像するだけで恐ろしい限りです。

首都デリーにもニューデリーとオールドデリーの地区があり、下級層が住むオールドデリーの中心に位置する観光名所の赤砂岩の「ラール・キラー」への道中、通りを歩くラッシュアワー並みの人の波、路上でシン〇ーを吸っている人、中央分離帯で暮らす家族、信号で停車した際に窓を叩く物売りの人々、「ハロ・マニ・サー(Hello, money, sir)」を連呼して寄って来て芸を見せて報酬を求める少女など、人生において見た事の無い風景を目の当たりにしました。

高速道路で目的地に異動している際には、パーキングエリアに寄って全員で漢気を見せて飲んだ「チャイ」(I)、運転手が鍵をかけてトイレに行っている際に、興奮した野犬6匹に囲まれてドキドキした経験(K)も、今となっては良い思い出です。

今回、人口も中国を超えて、次なる世界の中心国で5～10年後に商売となるものがあるかも旅の目的としておりましたが、共産圏では無い為、国として統率が取れていない現状、自己主張が強く、道路交通法がないような割り込み、人の横断、バイクの3人乗り、乗客2名のリキシャーに4～5名乗っている状況を考慮すると、この国は中国と比較にならないほど、発展が遅れるのではないかと感じました。ただ、全てのものに対しての需要は高まっていくと思われるので、市場としては非常に魅力的な国となるでしょう。

最後に、今回の貴重な視察に連れてきていただきました幸田会長、連日にわたって現地でアテンドしていただきました川本部長、夜遅くまで現場をアテンドしていただきました中谷支店長、帰国前日の晩に自宅で日本料理をふるまっていたいただいた神谷副会長、出国から帰国まで

無事に過ごせるようにアテンドしていただきました三崎室長、一緒に楽しい経験を致しました同行者の方々に重ねて御礼申し上げます。



インド門(ムンバイ)



タージマハル1



タージマハル2



パーキングエリアにて



チャイ



ビリヤニ



マトンカレー



プネー市街地



現地のコーラ(サムズ・アップ)



現地のビール1



現地のビール2



神谷副会長宅

PS 今回の記事は、帰国後、亡くなりました私の青春時代のアイドルをしのぶ気持ちの中、遠い街のどこかで…書かせていただきました。

